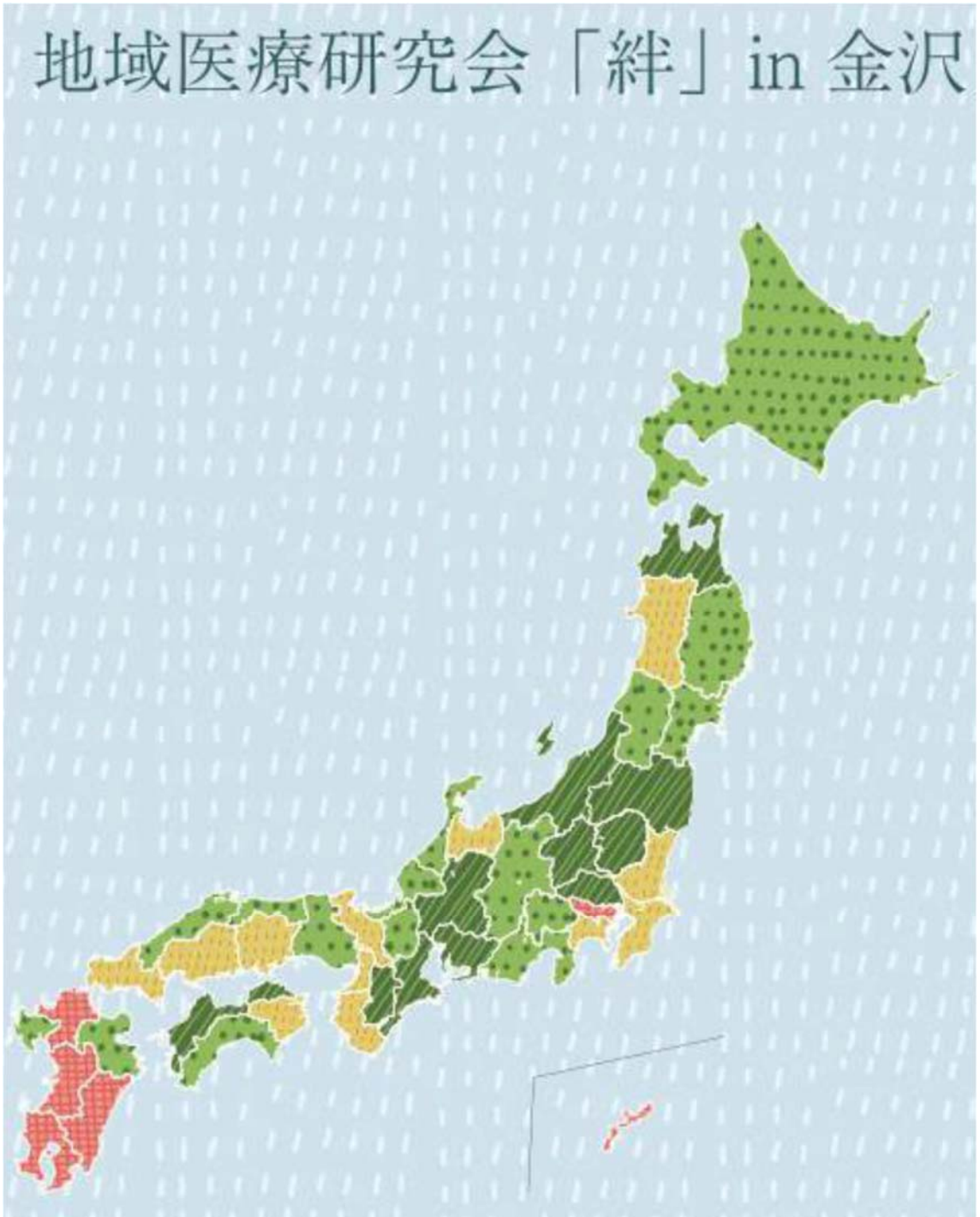


2016(平成28)年度  
在宅医療助成報告書

地域医療研究会「絆」in 金沢



地域医療研究会「絆」in金沢

(勇美記念財団の助成金の支援を受けています。)

「テーマ」

「自分が思う医療・看護・介護」を語る。

申請者 高橋昌克

所属機関 釜石市 金沢医科大学

「目的」：高齢化、高齢出産など社会構造の急速な変化が起きています。特に少産多死の現象は都市、地方に関わらず大きな問題となっています。特に地域のコミュニティの崩壊の危機が現実となっています。脆弱したコミュニティを補強するため医療・看護・介護を充実して地域の維持・活性に繋げる試みが、主に行政の後押しで各地に行われています。その中でも主軸となっているのが「ほとんど在宅、ときどき病院」とした在宅医療・看護・介護です。さらに在宅の拡がりに伴い、関連した企業、職能団体の重要性も増してきました。

在宅医療・看護・介護に従事しているおよび医療系企業・行政の第一線で活躍している方々（ステークホルダー）が、それぞれの立場・活動中で思う「人のために何かをする」について自由な闊論してもらう場を作るのが目的です。

そのために医療コミュニティ形成関係者達が集まって講演会や討論会など行う。関係者が常に親しい雰囲気で見聞交換できることを重視している為、組織が大きくなりすぎないようにしています。組織の大きさは、メンバーが全員の性格や仕事の内容を知り得る範囲に留めおくこととした。

事務局責任者 高橋昌克

【総覧】多くの専門家に大所高所より意見のべ指導する。

辻哲夫 先生

1971年東京大学法学部卒業後、厚生省（当時）に入省。老人福祉課長、国民健康保険課長、大臣官房審議官（医療保険、健康政策担当）、官房長、保険局長、厚生労働事務次官を経て、2008年4月から田園調布学園大学 教授、2009年4月から東京大学高齢社会総合研究機構 教授を務める。現在、東京大学高齢社会総合研究機構 特任教授。厚生労働省在任中に医療制度改革に携わった。編著書として、「日本の医療制度改革がめざすもの」（時事通信社）「地域包括ケアのすすめ 在宅医療推進のための多職種連携の試み」（東京大学出版会）「超高齢社会 日本のシナリオ」（時評社）等がある。

小森 貴 先生

昭和 54 年 3 月 24 日 金沢大学医学部卒 同年 54 年 6 月 金沢大学附属病院勤務  
昭和 58 年 4 月 石川県立中央病院耳鼻咽喉科 昭和 61 年 4 月 同病院耳鼻咽喉科医長  
平成元年 4 月 小森耳鼻咽喉科医院院長 現在に至る  
平成 10 年 4 月 1 日 石川県医師会理事 平成 18 年 4 月 1 日 石川県医師会会長  
平成 22 年 4 月 1 日 日本医師会理事  
平成 24 年 4 月 1 日 日本医師会常任理事 現在に至る

秋山 正子 先生

㈱ケアーズ 白十字訪問看護ステーション統括所長、暮らしの保健室 室長  
NPO 白十字在宅ボランティアの会 理事長

1973 年聖路加看護大学卒業 関西にて臨床及び看護教育に従事。実姉の末期がんの看取りを経験時に、在宅ホスピス ケアに出会い 1992 年から東京都新宿区にて訪問看護を開始。2001 年母体法人の解散に伴い会社設立。現在㈱ケアーズ代表取締役、白十字訪問看護ステーション統括所長として、新宿区及びを東久留米市にて訪問看護・居宅介護支援・訪問介護の 3 事業を展開。2011 年高齢化の進む巨大団地に暮らしの保健室開設

地域医療研究会「絆」の会

日時：平成 28 年 5 月 28 日午後 1 時から 6 時 30 分まで

場所：金沢ビジネスセンター

司会 秋本 可愛

1：00～1：05 挨拶 梅 博久（金沢医科大学呼吸器内科 教授）

1：05～1：15 辻哲夫 先生

1：15～2：10 講演「専門医制度と在宅医療について」10 分質疑応答

座長 中橋 毅 先生

演者 小森 貢 先生

2：10～3：10 今回 新参加者の自己紹介（1 名 3 分程度）

進行役 西上ありさ さん

3：10～3：30 休憩

参加者同士の交流・名刺交換

3：30～4：00 「私の思い」村上智彦先生 または永森克志先生

座長 佐藤 伸彦先生

4：00～4：30 「私の思い」西村先生

座長 秋本 可愛さん

4：30～5：00 「地域コミュニティにおける医療と福祉の役割」

座長 越田理恵 先生

5 : 30 ~ 6 : 00 「看護・介護の人材育成」

座長 加藤忠相 先生

6 : 00 ~ 6 : 20 秋山先生の思い（マギーズについて） 秋山正子 先生

6 : 20 ~ 6 : 30 総括 佐藤元美 先生

6 : 30 ~ 6 : 35 閉会 木村信吾 先生

### 1. 辻 哲夫先生（東大高齢社会総合研究機構特任教授）の言葉



東大高齢社会総合研究機構特任教授の辻先生からは、人口の高齢化に合わせて

て医療の形をドラスティックに変えていかなければならないという強いメッセージ。

それは成熟した国であるからこそできる取り組みであり、東アジア全体で進む高齢化への答えを

探すという仕事、久しぶりに日本に与えられた世界的な課題である、という一言に辻先生の熱意の源を理解できる。

さらに先生から、垂直方向での対話はどこまでいっても情報の非対称性から逃れられないのではないか。あわせて水平方向の対話が必要で、そのあたりの概念を、まちづくりから提案できないかと模索していることを話していました。

### 2. 小森先生（日本医師会常任理事）の講演



演題「専門医制度と在宅医療についてー新しい専門医の仕組みー かかりつけ医が地域を創るー」

小森 貴先生からは、専門医制度の形について、そして「総合診療専門医」について、これまでの経緯とこれからについて教えていただいた。総合診療専門医に求められるのは、家庭医療・プライマリ・ケア領域全般をカバーできる総合的な診療能力だけではない。小森先生は「茨の道が待っている」と表現されたが、地域とともに生きていく覚悟が必要であるという。総合病院の一次外来でスマートに診断できる医師、というよりも、それぞれの町で保険診療の枠を超えて地道に活動していく（多職種と連携し、地域のリソースを活用し、住民を活性化していく）というイメージ

を具田的にお話していただいた。

#### 4. 村上浩明の「父村上智彦に思い」



村上智彦先生のこれまでの取り組みと、ささえる医療研究所の活動に関する報告を子息 村上浩明さんが代理で講演する。

ささえる研究所の活動は、明確にコミュニティを打ち出している。専門職の技能としての垂直方向の徹底した対話とともに、コミュニティ内での水平的対話をする。プレゼンでその理念がよくわかりました。

闘病生活中の村上智彦先生が不在の中でも成長をし続けるという究極のマネジメントからは学ぶことが非常に多かった。

注1)村上智彦（夕張の医療崩壊を食い止め、現在は岩見沢、夕張、旭川を中心に「ささえる医療研究所」理事長として在宅医療と地域のコミュニティ形成に力を入れていました。現在、血液疾患のために治療中です。

#### 4. 西村先生（金沢赤十字病院副院長兼第一外科部長）の「私の思い」



西村元一医師は金沢赤十字病院副院長兼第一外科部長であり現在はガンの闘病中です。

「いつかやればいい」と思ってきたことが、その「いつか」はなくなる、と語り始めました。

だれに、どこまで状況を伝えるか、今、何をすべきか。

その自問自答は人生に終わりがあると実感せざる負えない状況に身を置かれ

「今から、どう生きるか」という「目標をもたざるをえない」という境地へ導かれました。

その過程の中で、自分の気持ちを分かってもらうことが必要になりました。

いろいろな「フリ」を試してみました。周囲のひとさまざまな「フリ」をします。しかし、ガンになったものしか分からないことがあります。「分かったフリ」は、ズレにつながっていくことも体感されました。

その時に必要な気づき、コミュニケーションを考えながら、西村医師は「対話が必要」だと思ったそうです。

そして、「院外に対話の場をつくる」と決断をしました。「医療以外の中立的な立場の人と会話をしたい」。



いのちと空間、夢物語から実現へ、金沢らしさを「食と空間」で演出することです。そこには仲間がいる。知識、役割をシェアすれば決して「孤独ではない」こと知ります。そして辿り着いたのは「金沢マギー」をつくることです。そこは、がん患者が「集う家」です。

「辛そうに思ったら関わること、積極的に手を出すこと」と言葉が見つからなかった時は触ってもらっただけでいい。

その時に、「自分ひとりだけではない」という安堵感が生まれるそうです。

近い関係だからこそ、家族だけでは煮詰まってしまうことがあります。

この言葉に、どう関わって良いのか分からなかった私は勇気をいただきました。

「自分に落とし込むことができるか」そこに必要な患者と医者とのコミュニケーション  
今回、西村先生のお話の中で心に残った言葉は「人生に終わりがああることを再認識できたからこそ今何をすべきかを考えることができる」というもの。自分が同じ状況になったとき、目標を持って生きることができるか正直自信がないが、西村先生は着実に理想の実現に向けて邁進されている。当事者の作る「金沢マギー」は、間違いなくこの地域のがん患者さんの救いになると確信した。

5. 越田理恵 金沢市保健局長の「地域コミュニティにおける医療と福祉の役割」の講演  
金沢市が医療・介護資源に恵まれた地域であることを越田局長から教えていただいた。



ディスカッションでは、リソースがあるだけではダメなのだ、ということが明確になった。下河原忠道さんからはサ高住の地域への開放、宇都宮宏子さんからは病院から在宅復帰支援、秋山正子さんからは病院の看護師やMSWが在宅療養の現場を経験してみてもという具体的な提案があった。

長先生は病院の立場から、高山義浩先生からは課題の抽出そのものが課題であるという指摘があった。

Studio-Lの西上ありささんからは行政が地域にアプローチする上での重要なポイントを教えてもらえた。道徳性と社会性と経済性。その3つの要素が交わり合う「Public Interest Design」の構築の重要性を提唱していた。暮らしの保健室、銀木犀、あおいケア等のコミュニティ事業でうまくいっているところは、たいていこのカテゴリーに分類されるように思う。トップダウンの地域づくりはうまくいかない理由がわかった。行政はなにかやればよいということではない。その関わり方がとても重要でると多くの方が意見を述べていた。

注2) 越田理恵：元小児科医の視点から、金沢市のソフトな地域包括ケアの推進に取り組ん

でいる。次の保健行政の要となる若手の育成に心を砕いている。連続した医療・看護・介護行政を視野におく行政官です。

注3) 下河原忠道：株式会社シルバーウッド 代表取締役/薄板軽量形鋼造（スチールパネル工法）躯体販売事業/財団法人サービス付き高齢者向け住宅協会理事/サービス付き高齢者向け住宅「銀木犀 ぎんもくせい」運営しています。我が家のようなところで、人に寄り添う介護を目指しています。

注4) 宇都宮 宏子：『在宅ケア移行支援研究所』起業独立し医療機関の在宅移行支援、地域の医療介護連携推進、在宅医療推進事業研修・コンサルテーションを中心に活動しています。

注5) 長 純一：石巻市立病院開成仮診療所所長として被災地でプライマリ・ケアを実践し人材の育成に取り組んでいる。

注6) 高山義浩：厚生労働省で 新型インフルエンザ対策や地域医療構想の策定支援に関わった。その後沖縄県立中部病院感染症内科・地域ケア科 医長。感染症診療や院内感染対策、在宅緩和ケアと地域医療の実践と若手の育成を行っている。

注7) 西上 ありさ：山崎亮氏率いるStudio-Lの有力なスタッフです。多くの街のコミュニティ・デザインをして実践しています。

#### 6. 加藤 忠相さんからは「ケアとは何か」という根源的な問いかけ。



それは「医療とは何か」という問いと平行でもある。

ケアの現場では、管理と支配から自立支援へ、と大きな価値観のシフトが具体的な形になって動き始めている。それが実現できているのはまだごく一部なのかもしれないが、「それが可能なのだ」という認識は着実に広がってきているし、菅原 健介くん（ぐるーみとび一代表）のように短期間で結果を出し始めている事業所もある。

医療はどうなのか？患者の生活や人生を管理・支配していないか？患者の自立を支援できているの

か？今までの概念を取り払ったケアについて語られていた。

注8) 加藤忠相：小規模多機能型居宅介護 あおいけあ代表 住み慣れた環境のもと、穏やかに重ねる。自分らしく生きたい人に寄り添う介護を追い求めています。

注9) 菅原健介：ぐるんとび一代表取締役、藤沢市で都市再生機構（UR）のもと団地の一室借りて小希望多機能ホームを開設する。日本で初の試みに挑戦しています。

#### 7. 秋山 正子さんからはマギーズ東京への思い



建物は完成が近づいている。周辺のがん治療拠点病院の看護師さん達と共に英国のマギーズを訪問し、具体的な支援展開の準備も着々と進んでいる。がんの治療が進歩し、サバイバーが増えたとしても、その人たちにとって住み心地のよい社会でなければ、患者さんを救ったことにはならないのかもしれない。

医療者が、病院の外で、白衣という鎧を脱いで、患者さんと向き合う。ここでも医療の定義を改めて考えさせられることになった。

#### 8. 佐藤元美先生の総括



全国の在宅、訪問の地域のコアが集まり、皆が熱く語り闘論する意義があるが。しかしこの熱が醒めないようにしてほしい。またそれぞれの場（地域）で、緩やかに繋がり助け合いながら頑張ろうと締めくくられました。



集合写真



参加者

氏名	所属	氏名	所属
辻哲夫先生	高齢社会総合研究機構特任教授・元厚生省事務次官	高山義浩	沖縄中部病院感染症科
小森貴先生	日本医師会専務理事 (専門医制度担当)	松嶋 大	盛岡ナラティブ代表
秋山正子先生	株式会社ケアーズ・白十字訪問看護ステーション代表	金谷潤子	札幌麻酔クリニック
田中 透	財務省主計局→釜石市副市長	佐々木 淳	医療法人社団 悠翔会 理事長・診療部長
尾崎誠一	志木市総務部長	長 英一郎	東日本税理士法人
久保眞一	川崎市健康福祉局医療政策推進室医療・介護連携担当係長	小林利彦	浜松医大医療福祉 支援センター 特任教授
越田理恵	金沢市保健局長	永森克志	岩見沢ささえるクリニック理事長
木村信吾	石川県健康福祉部地域医療推進室次長	長 純一	石巻市開成仮設診療所所長
橋本英樹	東京大学医療経済教授 地域医療創生会議委員	新堀 学	NPO 地域再創生プログラム 副理事長
鳩山紀一郎	東京大学工学部都市基盤	秋本可愛 (総合司会)	株式会社 Joint for Kaigo 代表取締役
後藤 純	東京大学高齢社会総合研究機構	川村啓子	彦根地域医療を守る会代表
木全真理	東京大学高齢社会総合研究機構	前田修子	金沢医科大学看護学部在宅医療科
西村元一	金沢日赤病院副院長	宇都宮宏子	在宅ケア移行支援研究所 宇都宮オフィス
村上智彦	ささえる医療理事長	松山なつむ	訪問看護ステーションかしわのもり
中橋 毅	金沢医科大学北部能登地域医療研究所長	小野寺江利子	公益財団法人シルバーリハビリテーション協会介護老人保健施設はくじゅ 総看護師長
井階友貴	福井大学医学部地域プライマリケア講座(高浜町国保和田診療所)講師	松山雅一	訪問看護ステーションかしわのもり

氏名	所属	氏名	所属
北澤彰浩	佐久中央病院小海診療所長	長谷剛志	能登総合病院歯科口腔外科部長
佐藤元美	藤沢病院院長	小川 利久	NPO エイジング社会研究センター 理事
飯島勝矢	東京大学高齢社会総合研究機構 地域医療特任教授	下河原 忠道	シルバーウッド代表取締役 15 アジア介護・看護大会で優勝
森田洋之	南日本ヘルスリサーチラボ代表	大向一成	ジャパン・ケア・サービス 東北統括
佐藤伸彦	医療法人社団ナラティブホーム 理事長	須藤 義	ささえる医療研究所代表取締役
井川 斉	医療法人葵会 NSW	西 耕一	石川県立中央病院内科部長
菅原健介	(株)ぐるんぴー代表取締役	橋本英樹	東京大学 医療経済 教授
加藤忠相	特定非営利活動法人 ココロまち 代表	梶博久	金沢医科大学副学長・ 呼吸器内科教授
高橋和人	特定非営利活動法人里・つむぎ 八幡平理事長・統括施設長	高橋昌克	金沢医科大学呼吸器内科・ 釜石市・釜石のぞみ病院
矢口智子	金沢脳神経外科病院診療支援 部副部長、日本医師事務作業補 助研究会理事長	松柳ひとみ	金沢医科大学呼吸器内科医局秘 書
橋本昌子	株式会社スパーデル代表取締役	田村智子	公益財団法人シルバーリハビリテ ーション協会八戸西健診プラザ
浮世満里子	全国心理業連合会代表	山口和俊	金沢市保健局 在宅医療支援室 長
西上ありさ	studio-L 街づくり	中島三津男	金沢市保健局在宅医療介護連携 支援 センター準備室長
鈴木 友紀夫	メディカル・ステージ執行役員	柴山朋美	金沢市保健局同保健師
金谷憲明	札幌麻酔クリニック院長	安土守子	金沢市保健局健康政策課担当課 長 保健師
洞庭賢一	金沢市医師会副会長(地域医療 担当) 洞庭医院院長		

#### この会の効果

- 医療、看護、介護、行政、コミュニティづくり、企業、研究者がそれぞれ立ち位置と方向を再認識して、新たなそれぞれの可能性について希望を抱く。
- 地域コミュニティや施設のリーダーが参加しているため、それぞれの地域の問題（介護離職、技術・情報不足、経営、街づくり）を共同で解決を試みている。
- 参加者が属している地域の多職種連携の講演会、市民フォーラムなどの講演活動の人的交流の幅が広がっている。
- 介護関係者と企業家が共同で介護機器の開発が進められている。技術的な開発などの多方面においても会のネットワークが役立っている。
- この会は各分野のベテランと若手を結び、次のこの国の社会を担う人材の育成に役立っている。（最大の目的）

#### 問題点は

医療コミュニティ形成関係者達が集まって講演会や討論会など行う。関係者が常に親しい雰囲気で見聞交換できることを重視している為、組織が大きくなりすぎないようにしています。組織の大きさは、メンバーが全員の性格や仕事の内容を知り得る範囲に留めおくことが堅持できるかが問題です。

この会の責任者としては、50名前後の会とし、それぞれ参加者が自分の地域に戻り更なるネットワークをつくり、有益な活動をしていただくこと強く願います。